



盤石老人を尾に於て昔より
莫逆の交り久しき時
をせしむるのそまひて
流木の果村のむらり
客中におはす三月の梅の
一句を蕭々たる
や下はとさうめおはす

個人研究費

雲英末雄

55-06546

夢惜まほしくも夢の世語を
一葉とく〜追悼に吟詠
手向ふと物〜後ふき人懐
門牆も遊ふ人多き中
其堂奥に外に梅鶴子
ありあ〜扇一紙あり
扇をよ〜譲るあり

譲りもや〜以空に
美の冬至梅を冊乃名歌
永く中道に風紙
扇をよ〜譲るあり

調系

辭世

冬至梅

教里行

果也

西苑月



朱仲画

雪香齋盤谷雙蓮居士像

雪香齋盤谷四季發句

とまろや老のまゆか注とと流
梅魚や蟻の乃付く神詣
まつ栴一重と云へる名そ定き
松さし木枝も葎の妻の日山
町屋ハ松の里低しほしき
北日とく亂れ名素る牡丹の春

石川や蟬の本末おあき堂
一萩館二日お家ぬ秋の風
葎と又雪さく有りふの月

九月在宇

かうろきや聖も居倦く誰か
よきやこみ流れもえや初句
三波をくまへしきるふるうか
東海や賣ひついでに佛

歌仙

雪空や踏けぬ若枝の歌
一羽多踏る岩のまろ
昔帆片帆藪朽たふのきて
引盃の軽き手こほ
在り乃沙汰お母お好り
唱音ハハぬ薫むの比

柘鶴

青高

啓史

尾谷

程祥

節士

眼のうらみ母き人有り秋のまゝ 珪 珪
 嗟哉乃南釋伽子たろ川越 雨 谷
 衣表衣知ぬき鞋の造り 雪 衫
 響ふくくと黒い出括子 汀 石
 不断ある琴の流とる母ち刺干 玉 珂
 四ッ谷の姉妹風呂敷子瓜 栖 鶴
 元彼のりふち寄籠母日も爛々 尾 谷
 田地一泊る朱子瑞垣 啓 史

鴨鶏の産れまう〜親知寸 方 國
 多魚採子子金徳 月 倫 和
 拾得も掃世語あり〜花巻 芝 光
 其文程口け母鹿の角落 車 英
 十 勉けて墨墨の巻も五十年 汀 石
 つい子のともり 柳母木枕 雪 衫
 多嗅いきり好き〜和町 風 切
 ちつ帳買ふ聲の刺立 袷 祥

又る是の向ふの極と向ふあふ 両谷
 三弦 第母おりのけの致 尾谷
 納豆汁あもたたくも法のを 雪衫
 梢ハ尖 まぬこくく 結果 両谷
 波あくる石垣厚む 暗所の城 袿祥
 律義用とみハ能け言ぬ 銀 栖鶴
 茶あも毒あもさく寸二日月 汀石
 瘦菜の螺壳 よる里 三蝶

痺と肺神もる氣きりさく寸 啓史
 むとくくを吹く思是の息 尾谷
 廓先ハ醫者の薬物換付み 汀石
 万葉も泣く三河可々か 袿祥
 あ持公の内も手向乃志の真 雪衫
 かけろふ定る線系如止 両谷

悼 句巡任到来

皆枯く眠れる山と云りぬる里 冠至

山葉意や昔一昔如庵さく 瓢舟

仙と八宮を云くや居士衣 千尉

法人の袂に書くも轉子の洞あさこえ

さゆくの洞をくり流中ふ 立路

孝を能言もくけて埋れ松 栖波

一常世母意水の向る 雅龍

浅草何く結寺盤谷冥墓中詣り
くる石牌のよめるこゝろさすまゝに
ね〜

消る葉もくもや墓も出終以 零和

多仙の強き中母表れるる 鯨測

貢の書も佛もるる物 東為

水音のよ〜や響もむ〜人 志成

い〜能れ仙の事も六つのも 田社

光〜も人ハ旭能水極る 皋鶴

茅や木ハ雪を全とさふ母別して、
雪積りよりさるる向が
一壺 鼓鷄

盤谷宗道世母ありて比三圍の
をへ回船せし事を今も
山ハ嘉月の末より

追悼の教母ハ江此集りて
沙汰ゆて袂母珠敷てを花
枯果る猶ハ法のおしゑるふ
山茶どもあて友る記日乾るぬ
律山 羽客 春蛾 撰居

云々の其中比の弥陀仏 露月
る仙や仏のう浪系白き 旦調
世母息をわくせう音結仏が 樓笛
護心皆うさるふかし聖が 風車
重母風日おちるふし嘉極 尤峨
さうせとそふい母極る巨燧が 信鳥
ふ鷲の雪が清新く洞うふ 鋤山
墓よりや阿と月ハある木のぬ 雪杭

かうとりの丸い果て言こう
故一
いそ人の念珠も懐らん玉も
路道

主波をさるるもさるるもさるる
かきさるるもさるるもさるる
けりて

おっ同ては泣かなくさるるもさるる
遷喬
美しく枯きよしりるもさるる
栢庭
娘母言の意降る空とさるる
訥子
あはさるるもさるるのふれ更衛
維帆

歌仙

彼國名月とさるるんを梅
芝光
茶子も枯くの聖道
栢鶴
師の留書もさるる顔を書き
徑祥
車の例もさるる子もさるる
倫和
月あより一羽鳥のうれさるる
汀石
色美しく林檎もさるるき
尾谷

多金もわりの高松破換寺 鶴
 とい祖父をい可人も馬 祥
 吸壳能もつた所も胃伊達 和
 仙基詞言まき 衣く 光
 藻の意も一きく白記を洗の粉 谷
 きの子飯能もえる尾の才 石
 千竿の刻れてこ海をのの角 光
 講釈るこの軽い 襦袢 鶴

菘醫者も穴の幅の光り松 祥
 笑ふ下々子に花も寐く 和
 宵の月糸水垂の嵐追ふ 鶴
 かる彼も母も袋縫ふ 篠 光
 十 高次を弦の志まぬ琴を也寸 石
 信丹ある意も詞哉い 谷
 岩勉く又くする流の多車 加
 杖も極も西化の素壹歩 祥

銀漢匍匐ふ我母十文字光
鞠々ふくく飛鳥井の月梅阿
龍尾字を何そと向へて下れ
向ふの内も倦れお檻岩和
相札ハ鉄櫃とくふあそく石
團扇ハ掃て雪の雫あふ光
焚く高く尾上の釜能音をとり
曉へて極極賣る来る石祥

風雲の流くもあふきの柳谷
五徳車あふ憊る本音夏祥
まじりくく物ぬる本ハ下あ有石
入日あつあ母存えさした里和
伏も同あ付くまの物云ん谷
惜しくくくあはるくたまる勢

哭雪香齋

墓の上母泣けぬ音乃多ふか 五鳳

跡遠くくき母啼くもまふか 君江

ま乃をきき人皆慕ふか 守墨

新しき草鞋母案や法の旅 来至

雪皆の流をききりん墓より 烏朝

道霜の天岳沈む穉の多 碩鼠

洞舟も弱き紙子の向が 鷺十

投の氷やまらるもをま梅 木芝

枇杷の意羨里ても永き鳴が 畔水

嗚呼おまつき我逢や雪窓窗 卯雲

手向舟も片便空より多仙心 吟糸

夜もも我ぬくぬ日有法の場 秀谷

初雪の氷み跡ふ光るも 群牛

初雪を手向て多く返りり 菊賀

極楽の多筋清く雪の色 枚曾

吊山人若くは生ぬ来宮佛 飲別
 枯物をまき養水を三河可 曲峨
 一吋の夢をや鴨が枕者へ 佐國
 今ハ昔筆のそとにや神が案 湖水
 弟一人が鋤がわらん 崖下 催耕
 とれしつて仙をおむ襟衣一 都巖
 雪の息を柔洵が汲むや礼 文睡
 跡が端がきや波が一かへり 潜魚

手向くや心の具が山檜 秋雨
 彼が母がひらき沙のそが 鋤之
 葉の成が水が檜が養れきよ 栖里
 人も雪を惜しむと枯時ふ 木雪
 閑伽桶と換る雪がちうき 雪溪
 雪が痛む日敷の梅の手向が 瓶石
 納豆が柏子がや酒が七五三 霞
 茶が振が也りて葉の行が 花溪

真深き子ハ知りもや官佛 三厄
 其の息煙くさかき蘭奢侍 縞衣
 十種糸の窓ハ嘉永如急伝るも 壺口
 六の意古来稀るるははか 可笑
 いつのみ巨魁るるはは法の乃 鳥角
 悔ふ唇さくし牛房五把 琴鶴
 淋しきや火鉢ハ消くおぼえは鐘 和喬
 穢石の色あはきし行おつき 百潭

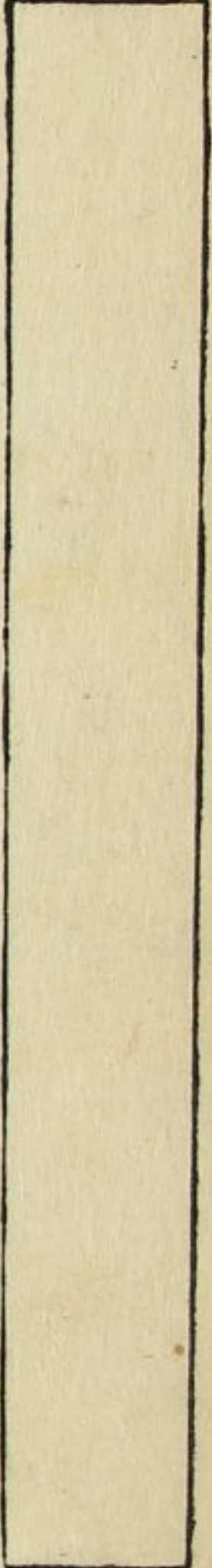
法の物た止標如木の窓が 桃谷
 おうの毛向ともおやき伝 素交
 異色ある花ハ凋ぬ意の雪 随我
 おやき消る管ハ知るる 魚川

生おとそを切を好すおのりおのり
 毛を傳ハ傳ハるる

空きくおきき麦みなりしは向とも 梅里子

悼

えて行當ハ夢死友ハ鳥 調和



存義

千足盤谷古來穠産の地とて
くちあつたの情をうつくしき世の
かこもりとてけききき世の隆とて
さうぬ

名系や寺も三ツ四ツ浦も有
有仇

蚕を育てえく身は朽系
平砂

老学は少くをまのふ蓄麦局
米仲

此世の善政をばとめく
年あり

風も何れもや角は西中
祇丞

盤谷老人とて年暮月七十余あり
常世におちちるぬとて中
栖鶴のまきて流るにさき
しとておちちるぬとて中
何恩のまきとて中

向も後世に及しぬとて高佛
買明

仙のまきぬ人の終りや雲仙
樓川

時向きぬ終り常世にめく
渭北

念何をやたぬとて流中
湖十

火がこきぬ記念の中終火桶
肯原

筆させ今と唱名の玉あはせ
心茶もや浮世花の結い仕舞
雪似心母外續いりりり
雪似雪ころも記いりの教もき
海いも能湯婆母泣そおきく
並立おし屋能雪とありあり

歳寒然後松柏知彫後

いと梅もく老木の志母もさか

紀逸

再賀

石腸

珠来

丈室

起雪

秀億

凝蝶能夢後ハ蓮の舎里也

木啓

舞の句母成有る

舞能能這事一も和嘉もくら
世の夢やさし一何婆能能不
炉能まもきのふとありて初昔
余不有寸耳をさおもや嘉の証
六の字能何母を一六の意
るま能能の出もうもむや需極

嘉延

竹郎

雞口

太祇

淡十

庭臺

障そりふおきく老木の雪結ふ 由林

柵隠

生涯の結講人更母一らまの
造り子マ〜と

おりの帯や汝え来雪佛 春菜

ぬの〜ふく白き〜雪仏 常仙

新涼く雲い屋としか〜菴 秋風

言才盤谷翁の世情庵の
結〜子悼心

空や鳥や秋勝る人のかげる月 羊素

悼 組合門人

杖より種と頼めぬ盤叟の子芝英也
道に花影の比共心な〜音信も
子猪の端〜み
かつ〜と杖も折らう言の中と中
をい帯〜み今中受れし〜いふ
詩みお池乃此曲里〜み〜
たより〜し〜

我杖もを折ら〜ら〜客中 東花

悼

名残阿〜の三日月極千山 梅光

惜しむ名やきのふ昔も雪み道 盤呂

悼

案中や似もりし世捨人 雪衫

盤谷居士と多年能琴子交り
厚しとくさく屋の我舎つと
をうらまればやも程祥も鳥の啼ぬ
日あはれとお逢さるの日は
東嶽の是母とらるい墨くも
月をとりあふしとてい
りぬるも老奴は比の
去年にさうとて年々

浅里行きし十の指折て
ぬる芝英も一回る

案月母思ふ出ま日能延母らり 啓史

案案案案案案案案案案
人かささささささささ
閑能あるの人あり物つささ
ぬれをえす味なけ性
三ふさる毎しとて
社師能像母おのり

法然母頂似る雪仙 程祥

蘭奢侍の言及及ももまの
客いなりきと巻とみ屬み
きりも去めしりみり奴

子多しつ流母や流能力か

汀石

先師とせこのころと
云とも風月中日教をやるし
とてまもる月の比より
とてよこころと黒母痛め
際茶のお話か多力なる
秋流能流きり母か
名月か多向の流能
せし母師も嬉しり月

母母書を授けせし

こころはよき言多
後句ありし母の月
枕みといひ日ま
時の末いのみか
法号のともも
案月お三日か
又多ぬ流母
筆母かきしり
一滴を流し

日向や宮の臺母蘭奢侍

尾谷

案月やあねを有との別札

倫和

新系

きふ二目を悦びぬる下略
者中の言を聞きぬる母の言
心細く思ひぬる母の言
果しき事ありぬる母

きふ二目を悦びぬる下略 新系

全

風流とていふは立く調度
只少くは物を好れぬる

足跡を窺ふ跡しして瀟子鳥

節士

冬を梅むらりる月の巻き進む

玉珂

水仙の姿も涙をぬるるる

珪璣

赤返りハワとてきぬるや雲結露

丹子

聖道堂一麻上下結衣の音

風切

帯け糸音ハハ大師の枕りて

三蝶

中子をきふハ洞の氷里とハ

方國

侍能辨る言ハハおあつき

両谷

盤谷史ハ師より又教族る
カハ二心の袂を濡しぬ

多ふき信ハ枝折らるる木立

車英

老翁の別進ハハ海江船の霧

瑠谷

きりぎりすのうみさしを
こゝろ

きりぎりすのうみさしを

梅阿

門葉の人式はきりぎりすのうみさしを
うちつとむるは福の致す歌仙を
も向ふふ夢の中へあはれさす
年比ききりぎりすのうみさしを
のうみさしをきりぎりすのうみさしを
おのうみさしをきりぎりすのうみさしを
さすあはれさすのうみさしを
さすあはれさすのうみさしを
人の實はきりぎりすのうみさしを
きりぎりすのうみさしを
きりぎりすのうみさしを

日
子
消
へ
使
こ
ろ
さ
き
り
ぎ
り
す
の
う
み
さ
し
を
き
り
ぎ
り
す
の
う
み
さ
し
を

青高

歌 仙 昔も老ぬの態を
思ふやう

程祥

軒の襦袢はきりぎりすのうみさしを
命毛をきりぎりすのうみさしを
何となく名もなき松のうみさしを
松のうみさしをきりぎりすのうみさしを
善の月もきりぎりすのうみさしを
新挽ぬまきの音はきりぎりすのうみさしを

栖鶴
雪衫
芝光
節士
啓史

深川の果も菊の烏帽子親 鶴
 按広きくせも吉見巻衣 衫
 白粥子湯着も風の吹廻り 光
 念彼の服くめ寸もきさ 士
 腰え、祝く鄰のかきつら 史
 袴はとの猫もく 祥
 新もけ淡路結い子も洗ひ 衫
 稲高は安き子に節 日 鶴

可内て花屋の埃ハ寄籠り 祥
 多除けて飛ぶも入る風 史
 葵控の挑町淋一區の月光 光
 河子強きとよみ鶴 以 士
 十 烟子を乃ぬける紐や 史
 深くハ人成山の子 井戸 祥
 三島雙えんと妻は星も笠 袴
 下ろすも足籠もとのう 衫

存の外 菟 菊 旁 行 南 将 寺 士
雪 能 世 界 舟 杖 の 如 糸 光
盗 人 の 假 櫓 通 る 泉 明 祥
牛 の 供 与 取 之 子 精 鞠
釣 込 の 富士 の 裾 登 舟 發 徳 床 史
武 士 能 本 御 舟 五 ところ 紋 士
陰 沟 所 ち 物 も 指 止 月 照 光
衆 を 計 る 糸 巻 心 雷 光

蠅 を 取 る ち ち も 弱 里 悔 の 蠅 初
筑 坡 も 又 へ ぬ 庭 舟 西 行 士
幸 々 晴 天 傘 の 荷 舟 成 る 只 言 光
中 宵 二 人 良 点 を 得 祥
こ 舟 来 して 舟 舳 せ の 舟 引 史
舟 心 船 里 ぬ 海 苔 の 層 光

雉髪之句

今と船

さむ刺刀の

天窓半

延享四卯年秋八月万句興行巢居栖鶴像



舟中画

北四

追悼獨吟歌仙

盤谷居士

冬玉梅あま行果也西の月
 おのきまゝく寸淋み写外 栖鶴
 河も煮ぬ茶罐の煙一まゝ
 きのおの人如物中とあ
 鷺土お沖舟のろまと帆紐船
 籠乃とまればぬ櫓を流めむ

七五

溝親の闇母はあゝぬいこ世
自惚〜〜〜世れ〜〜母熨斗
表者〜〜〜をる世〜〜目いふ
闇〜〜〜母罌子姑びく起
る兜瓜種教子智りりり
七通〜〜〜函磨の空は
杖持と成り測とるりぬる物入
茶子ニタ切し磨るび〜籠

対^{ヒテ}と孫吉きき月^{ヒテ}の枕あ〜
盃の左あゆくせと盃と
忌火亮と物の川遠母お崇る
と志の取リ母手拭ハ干て
人あ^{ヒテ}の化け歌りねと青卦母入
勾^{ヒテ}為ゆ〜れ間イの又皆イ
や〜〜〜き母刀を思れ〜時多
後の具き〜も四部お應

姐板母ハ記ニありキ 濠
三ノ國一一ノや聲うめける
子ハ正ノ精後おも母向子母
あへいっ山を越すは歌後
春るき村母暮れハ秋の蝶
眠き歌ノ羽子うし袖蓋
消る南一と瓦燈あれハ月満る
枝ハききぬ多瓶能口

け雪母袖子落きハ面白さ
あを嬌くる子人能世出き
少き袋袋母入く持てるよ
是ハ他力て出ます又父字
隈もるき天岳院能世の空
下手嘗能笑ハる能こ

百ヶ日悼

世

案の障内もふ日は暮らふ
梅光

初ふをよむ

惜まけ人の思日や花くのり
全

ふ日も夢ぼくよー雉子唱
盤呂

百ヶ日

百ヶ日待てや梅も咲く
東花

全

急めむ椀ハ手向の名りり
雲杉

全

お梅の泪蒼むや百ヶ日
啓史

喜の花や法あるよき九十九
莖光

百ヶ日障み縫一糸衣さくき
徑祥

塞み一炬の流淋一
汀后

くふをよむ毒の梅も散みり
尾谷

あめをそ川の音をよむ

三

死せんとすも二月そ百ヶ日 倫和
 美の安や百万通母めりし里 節士
 正月ハ夢と枕菜母初懐が 珪城
 消一人もふ百日々喜の言 玉珂
 涅槃會の序ふかあや百ヶ日 方國
 付きかひる接種もを後しふヶ日 丹子
 ふヶ日西星も西へ堪りか 兩谷
 行層母を傳るしをふヶ日 梅阿

指の歌仙を手向し
 又母士能佳く年成清る
 中々やうく小冊を綴り
 いさう寸志をこころみ跋と

粟居栖鶴

寬延二年歲宿己巳冬

巢居栖鶴輯
柳達徑祥書

彫刻吉田魚川

福上
涼風館主

輝